

# 大乘仏典の伝承者

## —dharmabhāṇaka（説法師）の位置づけ

渡辺 章悟

ここでいう説法師とは dharmabhāṇaka のことであり、パーリ三蔵にはなく、大乘仏教に特有の表現である。この語が注目されたのは、静谷正雄[1954]が、初期大乘経典の作者と想定した論攷を発表してからである。静谷の試論は、原始佛教から説法師は dhammakathika といわれていたのに対し、大乘経典になって dharmabhāṇaka が用いられるようになった。碑文上でもグプタ王朝以前には dharmabhāṇaka は用いられないことを明らかにした。

その後、塚本啓祥[1966]や西村実則（[1991], [1992]）が、この問題を精査したが、これらの説を要約すれば、部派仏教では bhāṇaka と dharmakathika が用いられていた。前者は一般社会では音楽にかかわる朗詠者であり、仏教教団では仏典を読誦、朗唱することを専門とする者である。後者は「法を解説する人」であり、いずれも比丘であるという。

基本的には比丘としての dhammakathika は部派教団から大乘にかけて共通に見られるが、dharmabhāṇaka は大乘でも経典類だけに認められる。ただし、dharmakathika は『法華経』『五百弟子受記品』（4例）に、dhārmakathika は『八千頌般若』（1例）にあるように、例外的に見ることはできる。それらの例を見ると、十大弟子として知られるプールナ（富楼那）やスプーティ（須菩提）のように、初期仏教以来の特定の仏弟子に限って用いられる称号である。つまり、大乘経典においては、dharmabhāṇaka は広く一般的に用いられているが、dharmakathika は初期仏教以来の残滓に過ぎない。

これに対し、Schopen[1975]は大乘の起源についてのチャイティヤ崇拜には注目しているが、なぜか dharmabhāṇaka と結びつけた議論はしていない。一方、bhāṇakaについては、仏説の正式な伝達者、朗唱者（the acknowledged transmitters of Buddhist teaching, reciter）とし、dharmabhāṇakaは説法者（a preacher of the Dharma）としたが、dharmabhāṇakaと大乘経典の興起との関連についての新知見は見られない<sup>1</sup>。

これまで、dharmabhāṇaka の重要性は認知されながらも、出家であるか否か、善男子・善女人、菩薩との関係や役割はいかなるものであったのかなど、未だ不明な点も多い。そこで本稿は大乘経典の中で描かれる dharmabhāṇaka の姿、その位置づけを新たな視点を持って考察することにしたい。

### 1. パーリ聖典の dhammakathika の用例

パーリ聖典では、シャーリプッタなど八人の主要な弟子の中で富楼那（puṇṇa mantāniputta）を説法者 dhammakathika と呼んでいるのはよく知られているが、一般的には、誦経者、持律者、説法者、禪定者などの僧の役職などが説かれる場合に、この dhammakathika（説法者）、あるいは dhammakathika- bhikkhu-（比丘である説法者）等と言われる。

一方、パーリ律（Vinaya III, p.159）には、比丘はsuttantika経師、vinayadhara持律、dhammakathika法師、jhāyin禅師などの四つの職制に区分される。また、『根本説一切有部毘奈耶』<sup>2</sup>では、これに論

師 (abhidhammika, ābhidhammika) が加わって、(1)経師、(2)律師、(3)論師、(4)法師、(5)禪師の五つとなる。

その他、*Abhisamācārika*、『十誦律』、『薩婆多毘尼毘婆娑』の分類でも大同小異であるが、これが『四分律』や『摩訶僧祇律』では、17の特性に分類されている<sup>3</sup>。これらは、基本的にはパーリ Vinaya の四職制に十二頭陀支<sup>4</sup>を加えたものである。

(1)阿練若阿練若共同。(2)乞食乞食共同。(3)納衣納衣共同。(4)不作餘食法不作餘食法共同。(5)一坐食一坐食共同。(6)一搏食一搏食共同。(7)塚間坐塚間坐共同。(8)露坐露坐共同。(9)樹下坐樹下坐共同。(10)常坐常坐共同。(11)隨坐隨坐共同。(12)三衣三衣共同。(13)唄匿唄匿共同。(14)多聞多聞共同。(15)法師法師共同。(16)持律持律共同。(17)坐禪坐禪共同。(『四分律』T1428、587b156-22)

この中で(1)から(12)は十二頭陀支であり、(13)唄匿 (ばいのく、ばいとく) は bhāṇaka の音訳、(15)法師は dhammakathika であろう。前者は教え (経) 暗唱して唄うもの、後者は教えを語る者である。

また、当時の僧院の職制は経師と法師は別であるから、dhammakathika は教えを考察したり、分析したりする論師に近い者と想定できる。したがって、上記の引用をパーリ Vinaya の四職制に当てはめれば、(14)多聞から(17)坐禪がそれに当たり、経師 (suttanthika) は多聞に相当するだろう。

## 2. Dhammakathika から dharmabhāṇaka へ

沙門の別称を並記することは、大乘にも十二頭陀として踏襲されてゆく。例えば、『二万五千頌般若』(Kimura [1990:44, 24-27]) にも、以下のような類似の表現がある。

「さらにまたスプーティよ、法師 (dharmabhāṇaka) は(1)林住者、(2)乞食者、(3)糞掃衣者、(4)食後に食を受けない者、(5)一坐食者、(6)少量の食事をする者、(7)墓場に住する者、(8)露地に住する者、(9)樹下に住する者、(10)常坐して横臥しない者、(11)随処住者、(12)三衣だけを持つ者となるであろう。」

本経では説法師 dharmabhāṇaka はこれら十二頭陀を行う**修行者の総称**として描かれるが、ここに dhammakathika は含まれていない。このような大乘での伝承の相違が確認できる。以下、実際に説法師が説かれる用例を、大乘の經典の文脈に沿って分析してみたい。

## 3. 『金剛般若』 *Vajracchedikā P.P.* に見られる経巻崇拜と説法師

大乘仏教は経巻崇拜を強調している。特に初期大乘の代表的經典である『金剛般若』の経巻崇拜を説く一連の章句は、大乘の起源を示すものとして G. Schopen[1975]が注目したことで知られている。ただし、『金剛般若』には dharmabhāṇaka は用いられず、Schopen も何も言及していない。それにもかかわらず、筆者はこの章句に続く語句に注目している。

さらにまた、スプーティよ、ある場所で、この法門のなかのたとえ四句からなる詩頌一つだけでも把握し、解釈し、あるいは説明することがあるとしよう。〔そのとき〕その場所は、神々や人間やアスラを含めた全世界にとって、“塔廟に等しいもの”(caitya-bhūta) となるであろう。〔中略〕スプーティよ、その場所には師がおられることになろう。あるいは、たとえ誰であっても賢い

師にふさわしい場所になろう」となっている。

api tu khalu punaḥ subhūte yasmin prthivīpradeśe ito dharmaparyāyādantaśaś catuspādikām api gāthām udgrhya bhāṣyeta vā samprakāṣyeta vā, sa prthivīpradeśaś caityabhūto bhavet sadevamānuṣāsurasya lokasya, ... tasmimś ca subhūte prthivī-pradeśe śāstā viharaty anyatara-anyataro vā vijñāguru-sthānīyaḥ<sup>5</sup> (『金剛般若』 Vajra §12, Conze [1957: 37.10–19], 渡辺章悟[2009])

このように、経典(金剛般若)が説かれるところ(yasmin prthivīpradeśe)、その場所が塔廟に等しいもの(sa prthivīpradeśaś caityabhūto)となり、その場所に師が住んでおり(tasmimś ca subhūte prthivī-pradeśe śāstā viharati)、賢い師にふさわしい場所(vijñāguru-sthānīyaḥ)になるというのである。ここには経巻と塔廟という二つの信仰が等置されているばかりでなく、説法師(dharmabhāṇaka)の語こそ見られないが、賢い師にふさわしい場所と言い換えられている。そして、なによりもこのチャイトヤ(caitya 塔廟)信仰の中心になるのが、経典を説く行為にあり、その実践者を「賢い師」(vijñāguru-)と尊称していることが重要である。

#### 4. 『迦葉品』 Kāśyapaparivarta の dharmabhāṇaka 関連表現

『迦葉品』(Kāśyapaparivarta, KP と略)は空を説く初期の般若経の影響を受け、菩薩のあるべき姿を述べている。後漢の支婁迦讖訳『遺日摩尼宝経』(T350)があることから、紀元後1～2世紀には成立していたであろう。本経には何力所かで説法師(dharmabhāṇaka)が登場するが、以下の例は極めて重要である。なお、ホルシュタイン本は不完全であるので、最近の Vorobyova の写本研究によって明らかになった部分を補足してある。

##### • Holstein (1926: 227-228, KP.160)

yatra ca prthivīpradeśo ayaṃ ratnakūṭo dharmaparyāyo bhāṣyate vā deśyate vā likhyate vā..... vā pustagatam vā tiṣṭhet sa prthivīpradeśe caityabhūto sadevakasya lokasya yasya ca dharmabhāṇakasyānt..... d imam dharmaparyāyam śrīṇuyād vā udgrhṇīyād vā likhed vā paryāpnuyād vā / tasya dharmabhāṇakasyāntike..... vaṃrūpā gauravām utpādayitavyaḥ tadyathāpi nāma kāśyapa tathāgatasya / y.....nakam satkariṣyati gurukariṣyati mānayaṣyati / pūj.....nakāle cāsya tathāgatadarśanam bhaviṣyati /

##### • Vorobyova (2002:57, 2-19)

ayaṃ tato bahutarah puṇyaskandhaprasuto bhavet\* yaś ca mātṛgrāma + fol. 81r (KP-SI P/2)

1 + .. .. śrīṇuyād vā likhāpayed vā paryāpnuyād vā tasya na jātu vinipāto bhaviṣyati / sa eva tasya paścimakah bhāvo

2 bhaviṣyati /

160 yatra ca prthivīpradeśe ayaṃ ratnakūṭo dharmaparyāyo bhāṣyate vā deśyate vā likhyate vā likhito

3 vā pustagatam vā tiṣṭhet sa prthivīpradeśo caityabhūto sadevakasya lokasya yasya ca dharmabhāṇakasyāntikād

4 imam dharmaparyāyam śrīṇuyād vā udgrhṇīyād vā likhed vā paryāpnuyād vā / tasya dharmabhāṇakasyāntike evaṃrūpā

5 gauravā-m-utpādayitavyaḥ tadyathāpi nāma kāśyapa tathāgatasya / yaś ca kulaputro vā kuladuhitā

dharmabhāṇakaṃ

fol. 81v (KP-SI P/2)

1 satkariṣyati gurukariṣyati mānayaṣyati / pūjayaṣyati / t. ...y. ...y. r. t. ...+++++

2 maraṇakāle cāsyā tathāgatadarśanaṃ bhaviṣyati /

また、ある場所において、この『宝積』(ratnakūṭa)という法門が説かれ、示され、書写され、書物として置かれているならば、その場所は、神々をも含めたこの全世界にとって、チャイトヤ(塔廟)と等しく「聖なるものと」(sa prthivīpradeśe caityabhūto)なるであろう。また、誰かある説法師(dharmabhāṇaka)のもとでこの法門を聞き、受持し、書写し、あるいは「その内容を」了解するとするならば、かの説法師に対して、あたかも、カーシャパよ、まさしく如来に対してと同様な尊重の心をおこすべきである。そして、もし人が説法師を尊崇し、尊重し、恭敬し、供養するであろうならば、彼は死のときに当たって、如来を見ることになるであろう。

上記のように、説法師がこの教えを説く時、善男子・善女人は、この説法師を如来と等しく尊崇すべきことを説く。ここにはブッダ崇拜を基礎として、＜経巻崇拜＝チャイトヤ信仰、説法師の尊重＞が述べられる。そして、ここにみられる caityabhūta-と dharmabhāṇaka-を含む章句が、『金剛般若』§12 で見た章句とパラレルであることは明らかである。

この塔廟に等しい場所を述べる箇所について、アサンガの註釈 *Trisatikāyāḥ Prajñāpāramitāyāḥ Kārikāsaptatiḥ* には、dvayasya pātrikaraṇān 「尊重於二處」(流支訳)、「兩成尊重故」(義浄訳)とあり、説法の場所と説法する人の両者が尊重されるべきことを示唆している<sup>6</sup>。カマラシーラの註釈(D Ma 234a2-3)では、「教主が住するというのは、説法するのである。教主のはたらきが為されるためである。彼こそは仏世尊が現前に住しておられるのと等しい、という意味である。上師のようなもののどれかというの、聖者マンジュゴーシャなどのどれかである。その行いを成就するから、説法者それが住すると見るべきなのである」<sup>7</sup>という。

つまり、Vajra P.P.の「賢い師にふさわしい」(vijñaguru-sthānīya)を、「上師のようなもの」(bla ma lta bu)、あるいは「聖者マンジュゴーシャなど」('phags pa 'jam pa'i dbyans la sogs pa)と具体名を出し、「説法者それが住する」(chos smra ba de gnas pa)と結論づける。カマラシーラによれば、この vijñaguru は dharmabhāṇaka に他ならないのである。

次に、この dharmabhāṇaka がその後的大乗經典でどのように描かれているのかを検討する。

## 5. 『法華經』法師品(Chap.10)における説法師(dharmabhāṇaka)

最初に説法師(dharmabhāṇaka)が、塔廟(caitya)、あるいは仏塔(stūpa)と結びつけて説かれる用例をさらに検討する。その代表的用例が初期大乘の代表的經典として知られる『法華經』であろう。特に『法華經』「法師品」(Chap.10)には、説法者がどのように説法するのかが具体的に説かれているので、最初のその概要を見ておきたい<sup>8</sup>。

### (1) 仏塔(stūpa) 崇拜とチャイティヤ崇拜の条件

ところで、薬王よ、ある場所で(yasmin ... prthivīpradeśe)、この法門が述べられたり、説かれたり、書写されたり、書写されたものが書物とされたり、暗唱されたり、斉唱されたりとしよう。薬王よ、地上のその場所には、高くそびえ立ち、宝玉よりなる巨大な如来の塔(tathāgatacaitya)が建立されるべきである。しかし、そこにならずしも如来の遺骨

(tathāgataśarīra)が収められる必要はない。それはなぜかという、そこにはすでに如来の完全な遺骨が安置されているからである。また、ある場所で (*yasmin prthivīpradeśe*)、この法門が述べられたり、説かれたり、暗唱されたり、斉唱されたり、書写されたり、あるいは書写されたものが書物とされたりするとしよう。そこでは、ストウーパ(stūpa)に対するような恭敬と尊重と尊敬と供養と讃仰が行われるべきである。(Vaidya [1960b: 145, ll.22ff])<sup>9</sup>

本用例では、「地上のある場所において」(*prthivīpradeśe*)とは、経典が読誦されたり書写されたりするところで、そこがチャイティヤ (*caitya*) と呼ばれる。チャイティヤは如来の遺骨を安置するストウーパ (*stūpa*) と同じように尊崇されるべきなのである<sup>10</sup>。そして、その根幹に経典を説く行為と説法者が尊重されるという点では変わりはない。また、そのサンスクリットの下線の文脈 (*yasmin prthivīpradeśe, ..., tasmimś ca stūpe satkāro gurukāro mānanā pūjanārcaṇā karaṇīyā*) が類似する点も注目すべきである。次いで、その法門を説く者とその説法の描き方を見てみよう。

## (2) 菩薩(説法師、善男子)の説法の時期とその対告衆

薬王よ、誰かある菩薩摩訶薩が、如来が涅槃に入った後の時代、後の時節に、この法門を四衆に説き明かすとしよう (*tathāgatasya parinirvṛtasya paścime kāle paścime samaye imaṃ dharmaparyāyaṃ catusṛṇāṃ paśadāṃ samprakāśayet*)。薬王よ、その菩薩摩訶薩は、如来の室に入り、如来の衣を身に纏い、如来の座に坐って、この法門を四衆に説くべきである。〔中略〕菩薩は菩薩の集団を前にして、ひるまず菩薩の乗り物によって出発した四衆に対して、〔この法門を〕説き明かすべきである。そして薬王よ、他の世界にいる私は、その〔説法者である〕善男子のために、〔神通力によって〕化作されたもの(化人)によって聴衆を集めるであろう。… 彼ら(化作された四衆)はその説法師のことばを退けたり、誹謗したりはしないであろう。もしまた、彼らが森に行くならば、私はそこにも彼(説法師)のために、多くの神々…ヤクシャを派遣するであろう。また、薬王よ、他の世界にいる私は、その善男子のために、顔を現すであろう。そして、彼がこの法門の字句を忘れているならば、彼が暗唱するときに、私は〔彼が思い出すように〕それらを再び説くであろう<sup>11</sup>。(Vaidya [1950b:146, ll.22ff])

上の引用(特に下線部)は説法者を善男子(*kūkaṇḍin*)あるいは菩薩〔摩訶薩〕と呼び、その対告衆は大乗を信奉する四衆である。菩薩は「如来滅後の法滅時に」こそ、「如来の室に入り、如来の衣を身に纏い、如来の座に坐って、この法門を四衆に説くべきである」とする。そして、ブッダはこの説法者である菩薩のために、経典の記憶を教化し、神々やヤクシャを派遣して彼らを守護し、さらに四衆を化作して聴聞させるという。

## (3) 説法師のとどまる場所

次に同章の偈頌より、説法師の属性がより明確になる箇所が見られる。以下の偈頌は説法師の当時の居住空間までも窺うことができる。

私(ブッダ)が完全な涅槃に入った後に、この経典を解き明かす勇者のために、私はまた多くの化作されたものたちを派遣するであろう。(27)

〔それら化作された〕比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たち、〔この四〕衆は、等しくまた彼(説法師)に供養をするであろう。(28)

そして、誰かが、土塊や棒、また非難や脅迫や侮辱を彼に与えるなら、化作されたものたちは、〔それから〕彼(説法師)を守るであろう。(29)



荒野にせよ山岳にせよ、人気のないところで、彼がたった一人で住んで(yadāpi caiko viharan ... narair virahite deṣe aṭavyāṃ parvateṣu vā)、暗唱しているときにはまた、(30)

そこへ私は、彼のために光り輝く私の身体をあらわすであろう。また、彼が暗唱するのに口ごもるなら、私は〔それを思い出させるように〕再三再四説くであろう。(31)

彼が一人で森で修行し(ekasya vanacāriṇaḥ)、そこで生活するならば、彼の仲間として、多くの神々やyakṣaたちを派遣するであろう。(32)

四衆に〔この法門を〕解き明かす彼(説法師)には、このような功德があるのです。〔彼が〕たった一人で森の洞窟で生活し(eko vihāre vanakandareṣu)、暗唱を行うとしよう。彼はまさに私を見るであろう。(33)

彼の能弁のひらめき(pratibhāna)は妨げられることなく、彼は多くの解釈と教えを知っている<sup>12</sup>。また彼は幾千・コーティもの命あるものたちを〔説法によって〕満足させる。なぜならば、彼はブッダによって加護されているからである。(34)

そして、彼(説法師)を頼りとする衆生たちは、みな速やかに菩薩となるのであり、また、彼との交流を深めつつ、ガンジス川の砂〔の数〕ほどのブッダにまみえることとなるのである。(35)<sup>13</sup>

以上、聖なる『正法蓮華』という法門のうち、「説法師」の第十章〔終わる〕

この章の最後のまとめで、説法師が教えを説く時期を、「〔ブッダが〕完全な涅槃に入った後」とするが、この記述は多くの大乘經典に説かれる法滅句に見られるものであり、先の(2)節と同意義である。本引用ではさらに、この經典を解き明かす説法者を勇者(vīra)と讃えている。

しかも、説法を行うものは「たった一人で荒野や山岳、森に行き、あるいは森の洞窟で生活し、この教えを暗唱する」という(Verse 32, 33)。この文脈は、あたらしい教えを説こうとする、当時的大乗の説法者の状況を示すものであろう。その姿は孤高の修行者である。彼らは孤独であるが、神々やyakṣaが彼の仲間としてブッダによって派遣されるという。この点も先の引用(2)に続くものである。

その修行を行うものはブッダにまみえ、ブッダの加護によって四無礙智を獲得し、多くの衆生を菩薩となさしめる。その際、説法者に求められる能弁のひらめき(pratibhāna)等の四無礙智は、ブッダによって加護されるものだからであり(buddhena adhiṣṭhitatvāt, Vers 34)、説法師の能力の裏付けを保証している。つまり、大乘の教えを説く説法師はブッダの保証(威神力)を得て説くものである。以上が、「法師品」で語られる説法師の姿である。

## 6. 『八千頌般若』(Aṣṭasāhasrikā P.P.)の dharmabhāṇaka

次に『法華經』と同じく、初期の dharmabhāṇaka を描く『八千頌般若』(Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā)を見てみたい。梵文『八千頌般若』には dharmabhāṇaka の用例は 37 件あるが、漢訳では法師、説法師、説法者等と訳される。その中での代表的用例を以下に検討する。

### (1) 神々が dharmabhāṇaka に pratibhāna を与える

世尊が仰せられた。「善い哉、善い哉、カウシカよ。この般若波羅蜜を讀誦している善男子、善女人には何百という神々が近づいて来るであろう。何千という神々、何十万という神々が、教えを聞こうとして(dharmaśravaṇāya 聞法)近づいて来るであろう。彼ら教えを聞く神々は、かの説法師(dharmabhāṇakas 法師)に能弁のひらめき(pratibhāna 樂説)を与えねばならないと考えるであろう。また、その説法師が話したいと思っていないときにも、彼ら神々はその教えが重要であるとして、

その善男子、善女人に語ろうという意欲が生ずるように、その（善男子、善女人）に能弁のひらめきを与えねばならないと考えるであろう。カウシカよ、この般若波羅蜜を習い、記憶し、… 読誦し、学習するであろう、かの善男子、善女人は、この現世の功德を（*dr̥ṣṭadhārmikam guṇam*）得るのである。」（Vaidya [1960a:41,30-42,7]）<sup>14</sup>

「また、カウシカよ、この般若波羅蜜について語る善男子・善女人には(*tasya kulaputrasya kuladuhiturvā imāṃ prajñāpāramitāṃ bhāṣamānasya*)、四衆の前で“誰か論難をしようとしているものが、私に質問しないように”という、恐怖心が生まれないであろう。なぜなら、般若波羅蜜が彼を護衛し、保護し、防御するからである。〔中略〕般若波羅蜜を習い、〔中略〕読誦する善男子・善女人は、このような現世の功德を得るのである。」（Vaidya [1960a:42, 8-17]）<sup>15</sup>

最初の引用に見られる「現世の功德」は、般若経を学び … 読誦し、学習するというものであり、それは般若経を聴聞しようと集まってきた神々が、説法師（*dharmabhāṇaka*）に与える能弁のひらめき（*pratibhāna*）にもとづくものである。しかもこの「現世の功德」は、般若経そのものに由来するという。このようにこの一連の引用では、同じ「現世の功德」の由来を、神々と經典という二つの面から述べている。このことは本経の他の箇所でも、あるいは般若経以外の經典中にも指摘できる。

ついで、もう一つ重要な点がある。それはこの前後の引用箇所で見られるように、明らかに説法師（*dharmabhāṇaka*）を善男子・善女人（*kulaputra- kuladuhitr-*）と言い換えていることである。善男子・善女人が出家者か、在家者かについては、別途検討したい。

## (2)三斎日における *dharmabhāṇaka* の説法と善男子・善女人

〔善男子、善女人たちには〕何千という神々が彼らに付き従って〔守護する〕であろう。〔半月の〕八日、十四日、十五日〔という三斎日〕に、善男子、善女人が説法師としてあちらこちらで般若波羅蜜を語るならば、そのたびに多大な福德が生ずるであろう。〔中略〕かの善男子・善女人には何千という神々が付き従って〔守護する〕であろう。そして何千という神々は、みんな教えを聞きたいと願ってそこへやってくるであろう。彼らは、この般若波羅蜜を説いている説法師を護衛し、保護し、防御するだろう。」（Vaidya [1960a, 100-101]）

ここでも説法師は善男子、善女人と言われている。ただし、ここで説法師が在家者の三斎日という潔斎の日と関連づけられているとしても、説法師を在家者と想定する必要はないだろう。あくまでこの日に僧院などにやって来る在家者に対して説法を行うという文脈だからである。小品系統の最初の翻訳である『道行般若経』にも、

「若し善男子、善女人、法師とならば、月の八日、十四日、十五日に説法の時、功德を得ることを復た計る可からず。」<sup>16</sup>

とある。これは最初期の大乗から善男子、善女人が説法師になることを示す重要な根拠であり、善男子、善女人の位置づけを考える際の基準になる。

この説法師である善男子・善女人には、何千という神々が付き従って、護衛するのであるが、この箇所に対応する『二万五千頌般若』（Kimura [1986:181, 7-8]）では、さらに詳しく、説法師に従う四天王を中心とする神々を「聞法者」とし、そこで正法師である善男子・善女人はこの般若波羅蜜を語るであろう（*yatra saddharmabhāṇakah kulaputro vā kuladuhitā vā imāṃ prajñāpāramitāṃ bhāṣiṣyāte*）とする。

続いて「魔事品」（Chap.11）には、善男子・善女人に障害を引き起こす「魔の仕業」（*māra karma*）

について、世尊がスプーティに教える場面で、説法師にたびたび言及する。以下は説法師が比丘であるとする用例を検討する。

### (3)説法師である比丘 1

さらにまた、スプーティよ、説法師である比丘たちは (bhikṣavo dharmabhāṇakāḥ)、独住性を好むものとなるであろう。一方、彼ら聞法者たちは (dhārmaśravaṇikās)、集会を欲するであろう。彼ら説法師は、次のように語る。「私に従ってくるものたちに、この般若波羅蜜を与えよう。私に従ってこないものには、与えない」と。こうして善男子・善女人たちは、欲求し、熱望し、教えを重んじて、その説法師に従ってゆくだろう。(Vaidya [1960a:121, 25-29])

このように説法師と聞法者を対峙して説いているが<sup>17</sup>、特徴的なのは説法師を比丘とする点である。実際、以下の文脈にも、このような「説法師である比丘」は何度も見られる。

一方、聞法者は、善男子と善女人たち (kulaputrāḥ kuladuhitaraś) と言い換えられ、説法師に従い、財物を施す在家者とみなされる。この文脈による限り、説法師は比丘、聞法者は在家であり、善男子・善女人ともいわれる。先ほどの例で、般若経を説く説法師を善男子・善女人と呼んでいたことを考えると、善男子・善女人は在家、出家という枠組みにはとらわれない呼称であることが判る。

### (4)説法師である比丘 2 —常啼菩薩品の説法師—

次は常啼菩薩品 (Skt.Chap.30) の一節である。本章は最初から本経に含まれていたのではないが、説法師が比丘であるという表現と、菩薩との関係において特徴がある。

善男子 (サダープラルディタ菩薩摩訶薩) よ、このように修行するならば、汝はほどなくして、書物の形にされるか、あるいは、説法師の比丘の身体に宿る般若波羅蜜を聞くだろう。〔中略〕善男子よ、お前はこれらの恩恵を考慮に入れて、説法師の比丘に対して、教師との観念を起こすべきである。しかし、善男子よ、お前は世財にひかれる心をもって、説法師の比丘につき従ってはならない。教えを求め、教えを重んじて、説法師の比丘に帰依すべきである。

〔中略〕善男子 (サダープラルディタ菩薩摩訶薩) よ、説法師の菩薩摩訶薩に五欲を用い、楽しみ、重んずるようにと提供する。彼 (説法師) はそれらのものへの (愛着) に負けてはいないのであるが、巧みな手立てによって [それらのものを] 用い、楽しみ、重んずるのである。しかし、善男子よ、お前はその説法師の比丘に不信の念を起こすのではない。(Vaidya [1960a: 238, 27-239, 20])

ここで引用した文中の「説法師である比丘の身体に宿った〔般若波羅蜜〕」([prajñāpāramitām ...] dharmabhāṇakasya bhikṣoḥ kāyagatām)、或いは「説法師である比丘」(dharmabhāṇaka- bhikṣu-) は、繰り返し説かれるが、漢訳『小品』にはただ単に法師、或いは説法師とするのみで比丘は見られない<sup>18</sup>。また、他の古い漢訳『道行』『大明度』にもない。静谷 (1974:288) もこの文脈から「五欲具足の在家生活者としての法師」の存在を指摘し、従来の比丘ではない菩薩を、大乘の法師の典型として描いた。そしてそれが法上菩薩なのであると主張する。

もし、邪悪な魔が五欲に耽るようにと提供するものを、この説法師が用い、楽しみ、重んじたとしても、彼に不信の念を起こすべきではないという。これは続く「法上菩薩(dharmodgata) の章」で、常啼菩薩(sadāprarudita) が法上菩薩に般若波羅蜜の説法を聞くために施与することを意図しているのである。

さらに、本文では「説法師の比丘」を「説法師の菩薩摩訶薩」と言い換えていることも注目すべ



きである。つまり、比丘は在家者ではないが、菩薩でもある。これが大乘でいうところの出家の菩薩なのである。

### (5)説法師と菩薩と善男子

続くダルモードガタ菩薩章 (Skt. Chap.31) には、説法師と菩薩と善男子の関係がよく判る文脈がある。サダープラルディタ菩薩は、ダルモードガタ菩薩の般若波羅蜜の教えを聞くために自分を差しだし、さらに「善男子よ、私 (サダープラルディタ) はあなた (ダルモードガタ) にこれらの端女を贈ります。これら五百台の車をご用に供するため差し出します」といった。

このとき、神々の主シャクラは、「善い哉、善い哉、善男子よ。菩薩摩訶薩は〔このように〕自己の所有物をすべて喜捨すべきです。このような喜捨の精神によって、菩薩摩訶薩はすみやかに無上正等正覚を覚るでしょう。また、このように説法師たちに供養した上でこそ、般若波羅蜜と善巧方便を聞くことができるのです」<sup>19</sup>とする。

この文脈の中では、二人は同じ菩薩でありながら説法師と聞法者であり、シャクラはサダープラルディタ菩薩に「善男子」と呼びかけ、聞法者のサダープラルディタ菩薩も説法師であるダルモードガタ菩薩に「善男子」と呼びかけている。

ここで判るように、菩薩摩訶薩と善男子の両者には区別ない。菩薩と善男子は説法師と聞法者に共有されうる語であり、上下の差別はない。ただし、説法師であるダルモードガタ菩薩が、「善男子よ」と呼びかけられることはあっても、説法師は一つの役割であるので、あくまで供養の対象であり、その用法は限定的である。

## 7. 四天王と dharmabhāṇaka の関係

### (1)『維摩経』の説法師

般若経は四天王を統率するシャクラ (帝釈天) を登場させ、般若経を説く法師の守護を説いたが、初期大乘経典の一つである『維摩経』「嘱累品」にも、dharmabhāṇaka が以下のように二度現れる。

その時、四天王は世尊に申し上げた。「世尊よ、どのようなところであれ、村、町、市、国、王城であれ、これらのような法門が行われ、教示され、開示されるところ、そこに世尊よ、我々四天王は、軍隊を伴い、車を伴い、眷屬を伴って、聴聞するために近づくでしょう。そして、かの説法師の周囲百由旬を守護するでしょう。例えば、かの説法師に付け入ろうとするものが、付け入る隙を与えないように」と<sup>20</sup>。

上の引用のように、どのような場所であれ、この法門を説く時、説法師とその場所は四天王によって守護されるのである。このことを四天王が宣言し、これに続いて世尊が阿難に対し、本経を受持して他者に開示すべきことを述べるのである<sup>21</sup>。この文脈における説法師と四天王の関係は『金光明経』を想起させる。

### (2)『金光明経』の四天王と説法師

本経は「四天王章」(Skt. Chap.6, 義浄訳第六品) を備える。その中で、世界の守護者 (lokapāla) と呼ばれる四天王が、『金光明経』を奉持し、それを語る「説法師」を鼓舞する姿がしばしば描かれる。また、本経では人間の王と説法師と四天王の関係が特徴的に描かれている。

それは「人間の王がこの経典を聴くことがあれば、王はその『金光明経』を奉ずる僧 (説法師)

に対して、怨敵から守り、援助する。このことを通して四天王は、国王とその衆生を庇護する」というものである。(Bagchi [1967: 37, 10-11])

また「尊き世尊よ、われわれ四天王はまた、それぞれ五百のヤクシャ衆の眷屬とともに、常に説法師である比丘を尊崇し、その説法師に愛慕と守護の念を抱き続けるであろう。(Bagchi [1967: 54, 8-10])とする。

この他にも説法師が多く登場するが、そのすべては「比丘である説法師」(bhikṣu- dharmabhāṇaka-)とする。また比丘がない場合でも文脈から、説法師は比丘であることが前提とされている。そして、かれらを鼓舞し、守護するのが四天王である。この四天王と説法師との関係は他の大乘經典にもしばしば見られるが<sup>22</sup>、本經の特色は人間の王が説法師の供養を介して四天王の庇護、現世利益を受けることができる点である。

## 8. 出家する説法師 dharmabhāṇaka — 『十地經』における説法師

比丘である説法師についての最も具体的な資料として『十地經』があげられる。本經において説法師(dharmabhāṇaka)が登場するのは、第三発光地においてである。この地ではひたすら一切法を如実に覚る仏知を観察し、法を求める菩薩が登場する。この求法の菩薩にとって、説法師の方についてはは会うことが難しい(難得の想)と考えられている<sup>23</sup>。これに対して、第五難勝地において、説法師は大きな変化をもって描かれる。

この地に住する菩薩は、「一切の菩薩である説法師に随順することにより、大いなる尊重と恭敬をもって師事する」<sup>24</sup>とあり、さらに「多くはこれらの如来の教説にしたがって出家する。出家してから聴聞した〔教説を〕保持する説法師となる。

さらに進んで、かの菩薩は、何百千億那由他の仏の面前で、何百千億那由他という劫の間、忘れることがないことによって、所聞の師にふさわしいダーラニー(dhāraṇī)を得た説法師となる」<sup>25</sup>とする。

ここで明らかなように、難勝地に至って、ようやく説法師となる菩薩が登場し、やはり他の大乘經典と同じく、過去の無数の仏に仕えて教えを聞き、そこで聞持したダーラニーを得て、説法師となることが描かれる。

ついで第九の善慧地の菩薩は、「説法師である性質をなしており、如来の法藏を守護する。彼は説法師の職分を得て、善巧なる知は無量となり、四無礙智によって菩薩の言葉で法を説示する」<sup>26</sup>とある。また同章に「汝等仏子よ。このような無礙智を実現するに巧みなこの菩薩が、第九番の菩薩地に至り、如来の法藏を得て、偉大なる法師の性質を達成するとき、意味、法、知の成就、光明、財、善慧、火炎を含んだダーラニーを備え、無礙門…百万阿僧祇を満たすダーラニーを獲得する<sup>27</sup>、云々と繰り返されている。

以上、本經では、菩薩は第五の難勝地において出家し、多くの仏より聴聞した教説を保持する説法師となる。さらに、第九の善慧地において、偉大なる説法師の位(mahādharmabhāṇakatva)となり、多くのダーラニーを得ることが、幾度となく強調される。説法師にとって、四無礙にもとづいた辯才と所聞の教えを決して忘れないダーラニーこそが、衆生に対して滞りなく説法をするために必要なのである<sup>28</sup>。

説法師の守護と陀羅尼の関係は、『法華經』『法師功德品』(Chap.18)<sup>29</sup>にも記載されており、大乘の特徴の一つとなっていることはすでに氏家覚勝[1984, 1987]らによって指摘されている。

## 9. 伝統僧団から非難される説法師 —『法華経』「勸持品」—

次に、『法華経』「勸持品」(Chap.12)には、この経を受持する説法師たちがどのような状況であったのかを、伝統教団からうけた非難の数々によって窺うことができる。その用例を見てみたい。

### (1) 法華経の説法者が比丘であること

智慧劣なものたちは森林での生活(阿練若)を守り、襤褸をつづった衣(納衣)を纏っただけで、「われわれは耐乏の生活をしている」というでしょう。(12-5)

味覚の楽しみに貪りとりわれているものが、在家の人々に教えを説き、六種の神通をそなえた〔阿羅漢〕のように敬われるでしょう。(12-6)

〔彼ら〕私どもを謗るものたちは、〔内側に〕凶暴な心をいだき、憎悪をたぎらせ、家庭や財産に心を奪われながらも、〔比丘にふさわしい〕森林〔を住处とする〕というかくれ蓑に隠れて、(12-7)

私たちについてこのように言うでしょう。「これらの比丘たちは異教徒であって、利得と名誉にとらわれて、自分たちの〔勝手気ままな〕言い分を教える」(*lābhasatkāraniśritāḥ / tīrthikā batime bhiksū svāni kāvyāni deśayuh*)と。(12-8)

〔また、〕「利得と名誉を求めて、自分で経典を編纂し、集会の中央で説教する」(*svayam sūtrāni granthitvā ... parśāya madhye bhāṣante*)と私たちを罵るものもいるでしょう。(12-9)

国王たちにも、王子たちにも、同じく、王の大臣たちにも、バラモンたちにも、家長たちにも、さらに他の比丘たちにも、(12-10)

私たちのことを非難して、「異教の教義を広めるもの」(*tīrthyavādaṃ ... kārayī*)と言うでしょう。

〔しかし、〕私たちは偉大な聖仙たちを尊敬することによって、〔その〕すべてを耐え忍びましょう。(12-11)

眉をひそめられたり、繰り返し何度も〔座席を〕割り当てられなかったり、精舎から追い出されたり、種々の悪口雑言を浴びせられても、私たちは〔その〕すべてを和え忍ぶべきです。(bhr̥kūtī sarva sōdhavyā *aprajñaptiḥ punaḥ punaḥ / niṣkāsaṇaṃ vihārebhyo bandhakuttī bahūvidhā*, 12-17)

後の時代において、世間の保護者の命令を思い起こして、私たちは恐れなき自信を持って、集会の中央でこの経典を説くでしょう。(12-18) <sup>30</sup>

ここで明らかなように大乘の教え(法華経)を説く説法師は、「これらの比丘たちは」と言われるように明らかに出家者であった。しかし、当時の比丘僧団からは、「異教の教えを広めるもの(*tīrthyavādaṃ ... kārayī*)」として、精舎から追い出されたり(*niṣkāsaṇaṃ vihārebhyo*)、非難されたりされていた異端であった。その理由は、彼ら比丘たちは、自分勝手な教えを説き(*bhiksū svāni kāvyāni deśayuh*)、経典を勝手に編纂したり(*svayam sūtrāni granthitvā*)、しかも集会の中心となって説法を行っていたからである。まさに伝統教団から飛び出した異端児たちであった。

しかも、「指導者よ(*nāyaka*)、この世に〔この教えを〕求めるものがあれば、城市でも村でも、どこまでもたずねて行って、あなたから委託された〔この教え〕をその人に伝えましょう」(Vers 12-19)

<sup>31</sup>というように、堅固な布教者の姿が描かれる。これが法華経で奨励する説法師の姿なのである。

## 結 論

説法師 *dharmabhāṇaka* は大乘経典において、*dharmakathika* にかわる存在として登場した。その姿は以下のようなものであったろう。

(1)出家者である dharmakathika の属性を引き受けながら、新たな信仰の推進者となった。大乘法門は、如来の滅後（五百年代に）なって、この説法師（dharmabhāṇaka）によって唱導された。

(2)説法師によって大乘の教えが説かれるところは、どこであっても caitya（祠堂、仏塔）と呼ばれる。その caitya には如来の教えを示す遺身が所蔵されているからである。そのためにその教えを説く説法師は仏と同様に尊崇される。

(3)説法師は帝釈天や四天王などの神々によって守護される。その説法に当たっては、無礙智とダーラニーの呪句（dhāraṇīpada-）が神々によって与えられる。このような聖なる言葉の威力を認める点は、『法華経』や『金光明経』などで強調される点である。また、神々は説法師に能弁のひらめき（pratibhāna）を与え、説法に対処できるとする。これは説法師が四無礙智に代表される雄辯や教えを記憶する力を必要としたためである。

(4)説法師はほとんどの経典では比丘とされるが、十地の修行体系の中では第五難勝地にいたって出家し、説法師となるという。このように比丘である説法師という表現は多くの大乘経典に共通する。

(5)説法者は森や人気のないところにとどまる修行者であり、経典編纂を行っていたこともうかがわれる。彼らは「これらの比丘たち」と言われるように明らかに出家者であったが、当時の比丘僧団からは、「異教の教義を広めるもの」（tīrthyavādāṃ ... kārayī）として疎まれ、精舎から追い出されたり、非難されたりする異端であった。その理由は「自分勝手な教えを説き、経典を勝手に編纂」したり、しかも集会の中心となって説法を行っていたからである。これらの詳細な記述は、『法華経』にはっきりと描写されており、当時の大乘教団の状況を語るものと言える。

(6)大乘では菩薩も善男子も、出家・在家の区別はない。菩薩の説法師も聞法者も互いに「善男子」と呼びあい、この語に上下の差別がない。この菩薩と善男子という呼称に比べ、説法師は明確に出家者なのであり、大乘の教団の中核になっていることが指摘できる。dharmabhāṇaka（説法師）こそ、あらたな大乘経典の制作を担い、宣教する、まさに大乘仏教運動の推進者であったのであった。

## 【参考文献】

氏家覚勝[1984]:『陀羅尼の世界』東方出版、1984.

氏家覚勝[1987]:『陀羅尼思想の研究』東方出版、1987.

静谷正雄[1954]:「法師（dharmabhāṇaka）について—初期大乘経典の作者に関する試論」『印仏研究』第三巻 第一号、1954, pp.131-132.

塚本啓祥[1966]:『改訂増補 初期仏教教団史の研究』山喜房佛書林、1966、pp.390-409.

大正綜仏[2004]:大正大学総合仏教研究所梵語佛典研究会編『梵蔵漢対照 維摩経』、大正大学出版会、2004.

大正綜仏[2006]:大正大学総合仏教研究所梵語佛典研究会編『梵文維摩経』—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂一、大正大学出版会、2006.

西村実則[1991]:「大衆部・説出世部における説法師」『仏教論叢』35, 1991, pp.13-18

西村実則[1992]:「説法師一部派と大乘との対比」『般若波羅蜜多思想論集 真野龍海博士頌寿記念論集』山喜房佛書林、1992, pp.389-426.

松濤・長尾・丹治[1975]:松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義訳『法華経Ⅰ』（大乘仏典4）、中央公論社、1975.

松濤・長尾・丹治[1976]:松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義訳『法華経Ⅱ』（大乘仏典5）、中央公論社、1976.

渡辺章悟[2009]:渡辺章悟編『金剛般若経の梵語資料集成』山喜房仏書林、2009

渡辺章悟[2017]:「説法師（dharmabhāṇaka）考」『印仏研究』66-1,2017,pp.404-398.



- Bagchi[1967] : Sitansusekhar Bagchi ed., *Suvarṇaprabhāsa-sūtra*, *Buddhisṣy Sanskrit Texts* No.8, The Mithila Institute: Darbhanga, 1967.
- Conze [1957] : Edward Conze, ed., *Vajracchedikā-prajñāpāramitā*, *Serie Orientale Roma* XIII, Rome: IsMEO, 1957; rev. 2nd ed., 1974.
- Harrison & Watanabe [2006] : Paul Harrison and Shogo Watanabe, *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, *Manuscripts in The Schøyen Collection, Buddhist Manuscripts Volume 3*, General Editor: Jens Braarvig, Hermes Publishing: Oslo, 2006, pp.89-132.
- Holstein [1926] : Baron A. von Staël-Holstein: *The Kāśyapaparivarta. A Mahāyāna-sūtra of the Ratnakūṭa Class*, edited in the Original Sanskrit, in Tibetan, and in Chinese, Shanghai, 1926. (Reprint, Tokyo, 1977).
- KN[1908-1912] : H. Kern and B. Nanjio eds., *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*, *Bibliotheca Buddhica* X, St.Petersbourg, 1908-1912.
- Schopen [1975] : Gregory Schopen, The Phrase *sa prthivīpradeśaś caityabhūto bhavet* in the *Vajracchedikā*: Notes on the Cult of the Book in Mahāyāna in *Indo Iranian Journal* 17(1975)147-181. Reprinted in *Figments and Fragments of Mahāyāna Buddhism in India: More Collected Papers*, University of Hawai'i Press: Honolulu, 2005.
- Schopen [1984] : Gregory Schopen, Two Problems in the History of Indian Buddhism. *Stil*.10, 1984, pp.23-26.
- Tucci[1978] : G. Tucci ed., *Minor Buddhist Texts*, Tokyo:Rinsen, 1978.
- Vaidya[1960a] : P. L. Vaidya ed., *Aṣṭasāhasikā Prajñāpāramitā*, *Buddhist Sanskrit Texts* No. 4, The Mithila Institute: Darbhanga, 1960.
- Vaidya[1960b] : P. L. Vaidya ed., *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*, *Buddhist Sanskrit Texts* No. 6, The Mithila Institute: Darbhanga, 1960.
- Vaidya [1967]: P. L. Vaidya ed., *Daśabhūmisūtra*, *Buddhist Sanskrit Texts* No.7, The Mithila Institute: Darbhanga, 1967.
- Vorobyova [2002] : M. I. Vorobyova-Desyatovskaya (in collaboration with S. Karashima and N. Kudo): *The Kāśyapaparivarta, Romanized Text and Facsimiles*, *Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* V, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University:Tokyo, 2002.

## 註

- <sup>1</sup> Schopen (1984).
- <sup>2</sup> T1442, 696b14-22.
- <sup>3</sup> 詳細は西村[1992: 413-416]。その他、*Mahāniddesa* (『大義釈』 PTS, Vol. Nd1-1, 147) では 18 種あげられるが、これも禪師を四禪定と四無色定を八つに開いてはいるが、基本的な四種に頭陀支が加わったものといえる。
- <sup>4</sup> 南宋の翻訳者、求那跋陀羅 (394-468) 訳の『十二頭陀經』(T783) によれば、1) 人家を離れた静かな所に住する、2) 常に乞食を行ずる、3) 乞食するのに家の貧富を差別選択せず順番に乞う、4) 1 日に 1 食する、5) 食べ過ぎない、6) 中食以後は飲物を飲まない、7) 檻樓で作った衣を着る、8) ただ三衣だけを適量所有する、9) 墓場・死体捨て場に住する、10) 樹下に止まる、11) 空地に坐す、12) 常に坐し横臥しない、の 12 項目である。
- <sup>5</sup> Harrison & Watanabe[2006, folio 38v1]では *vijñaguru-sthānīyaḥ* を *gurusthānīyaḥ* とする。
- <sup>6</sup> Tucci[1978: 65].
- <sup>7</sup> Derge ed., (*ston pa gnas zhes bya ba ni chos smra ba ste/ ston pa'i mdzad pa mdzad pa'i phyir te/ de nyid sangs*

rgyas bcom ldan 'das mngon sum du zhugs pa dang 'dra'o zhes bya ba'i tha tshig go/ bla ma lta bu gang yang rung ba zhes bya ba ni 'phags pa 'jam pa'i dbyans la sogs pa gang yang rung ba ste/ de'i mdzad pa bsgrub pa'i phyir chos smra ba de gnas par blta'o//

- 8 本稿の法華經の日本語訳については松濤・長尾・丹治[1975, 1976]を参照した。
- 9 yasmin khalu punarbhaisajjarāja prthivīpradeśe 'yaṃ dharmaparyāyo bhāṣyeta vā deśyeta vā likhyeta vā likhito vā pustakagataḥ svādhyāyeta vā saṃgāyeta vā, tasmin bhaisajjarāja prthivīpradeśe tathāgatacaityam kārayitavyam mahantaṃ ratnamayamuccaṃ pragrhitam na ca tasminnavaśyaṃ tathāgataśārīrāṇi pratiṣṭhāpayitavyāni | tatkaśya hetoḥ? ekaghanameva tasmīnstathāgataśārīramupanikṣiptaṃ bhavati | yasmin prthivīpradeśe 'yaṃ dharmaparyāyo bhāṣyeta vā deśyeta vā paṭhyeta vā saṃgāyeta vā likhyeta vā likhito vā pustakagatastīṣṭhet tasmimśca stūpe satkāro gurukāro mānanā pūjanārcanā karanīyā | (KN [1908-1912:231, 7-232, 2]). (Vaidya [1960b:145, 22ff])
- 10 『法華經』「普賢菩薩品」(Chap.26)の末尾においても、説法師 (dharmabhāṇaka) ではなく、經典の受持者 (sūtrāntadhāraka) としてではあるが、これと同趣旨の文脈が述べられる。「この法門を受持する比丘たちを迎えて、人は遠くから立ち上がり、如来に対して敬意を払うように、それと同じように、これらの經典を受持する比丘たちに対しても (sūtrāntadhārakāṇām) 敬意を払うべきである」。(Vaidya[1960b:267, 25-26 ]) (KN [1908-1912:483, 2-4])
- 11 yaḥ kaścīd bhaisajjarāja bodhisattvo mahāsattvastathāgatasya parinirvrtasya paścime kāle paścime samaye imam dharmaparyāyam catasrṇām parśadām saṃprakāśayet. tena bhaisajjarāja bodhisattvena mahāsattvena tathāgatalayanam praviśya tathāgatacīvaram prāvṛtya tathāgatasvāsane niśadya ayam dharmaparyāyaścatasrṇām parśadām saṃprakāśayitavyaḥ | katamaśca bhaisajjarāja tathāgatalayanam? sarvasattvamaitrīvihāraḥ svalu punarbhaisajjarāja tathāgatalayanam | tatra tena kulaputreṇa praveṣṭavyam | katamacca bhaisajjarāja tathāgatacīvaram? mahākṣāntisauratyam khalu punarbhaisajjarāja tathāgatacīvaram | tattena kulaputreṇa vā kuladuhitrā vā prāvaritavyam | katamacca bhaisajjarāja tathāgatasya dharmāsanam? sarvadharmāśūnyatāpraveśaḥ khalu punarbhaisajjarāja tathāgatasya dharmāsanam | tatra tena kulaputreṇa niśattavyam, niśadya cāyaṃ dharmaparyāyaścatasrṇām parśadām saṃprakāśayitavyaḥ | anavalīnacittena bodhisattvena purastādbodhisattvaganasya bodhisattvayānasamprasthitānām catasrṇām parśadām saṃprakāśayitavyaḥ | anyalokadhātusthitaścāhaṃ bhaisajjarāja tasya kulaputrasya nirmītaiḥ parśadaḥ samāvartayaiṣyāmi | nirmītaṃśca bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikāḥ saṃpreṣayaiṣyāmi dharmāśravaṇāya | te tasya dharmabhāṇakasya bhāṣitaṃ na pratibādhiṣyanti, na pratikṣepsyanti | sacetkhalu punararaṇyagato bhaviṣyati, tatrāpyahamasya bahudevanāgayakṣagandharvāsurasgaruḍakinnaramahoragān saṃpreṣayaiṣyāmi dharmāśravaṇāya | anyalokadhātusthitaścāhaṃ bhaisajjarāja tasya kulaputrasya mukhamupadarśayaiṣyāmi | yāni ca asya asmāddharmaparyāyāt padavyaṇjanāni paribhraṣṭāni bhaviṣyanti, tāni tasya svādhyāyataḥ pratyuccārayaiṣyāmi || (Vaidya 1960b:146, //22ff) (KN234-235)
- 12 ここで述べられる雄辯力、解釈、教えとは、四無礙智 (pratisamvid) である雄辯力 (pratibhāna)、解釈 (nirukti)、教え (dharma)、意味 (artha) の最初の三つのことであろう。
- 13 aham pi tasya vīrasya yo mahya parinirvrte / idam sūtram prakāśeyā preṣeṣye bahu nirmītan // Saddhp\_10.27 // bhikṣavo bhikṣuṇīyā ca upāsakā upāsikāḥ / tasya pūjāṃ kariṣyanti parśadaśca samā api // Saddhp\_10.28 // loṣṭaṃ daṇḍāṃstathākrośāṃstarjanāṃ paribhāṣaṇāṃ / ye cāpi tasya dāsyanti vāreṣyanti sma nirmītaḥ // Saddhp\_10.29 // yadāpi caiko viharan svādhyāyanto bhaviṣyati / narairvirahite deśe atavyāṃ parvatesu vā // Saddhp\_10.30 // tato 'sya ahaṃ darśiṣye ātmabhāva prabhāsvaram / skhalitaṃ cāśya svādhyāyamuccāriṣye punaḥ punaḥ // Saddhp\_10.31 // tahiṃ ca sya viharato ekasya vanacāriṇaḥ /

devān yakṣaṃśca preṣiṣye sahāyāṃstasya naikaśaḥ // Saddhp\_10.32 //  
 etādrśāstasya guṇā bhavanti caturṇa parṣāṇa prakāśakasya /  
 eko vihāre vanakandareṣu svādhyāya kurvantu mamāhi paśyet // Saddhp\_10.33 //  
 pratibhāna tasya bhavaṭi asaṅgaṃ nirukti dharmāṇa bahū prajānāti /  
 toṣeti so prāṇisahasrakoṭyaḥ yathāpi buddhena adhiṣṭhitatvāt // Saddhp\_10.34 //  
 ye cāpi tasyāśrita bhonti sattvāste bodhisattvā laghu bhonti sarve /  
 tatsaṃgatiṃ cāpi niṣevamāṇāḥ paśyanti buddhāna yatha gaṅgavālikāḥ // Saddhp\_10.35 // (Vaidya[1960b:147,  
 1.30-247, 1.22]) (KN:237, 1.1-238, 1.4)

- 14 「佛言。憍尸迦。是善男子善女人。受持讀誦般若波羅蜜。若干百千諸天大衆。爲聽法故來至其所。是法師爲諸天說法時。非人益其氣力。若法師疲極不樂說法。諸天恭敬法故令其樂說。憍尸迦。是亦善男子善女人得是現世功德。」(『小品般若』 T227.8.544b19-23)
- 15 「復次憍尸迦。是善男子善女人於四衆中說般若波羅蜜時。其心不畏有來難問及詰責者。何以故。是人爲般若波羅蜜護念故。」(『小品般若』 T227.8.544b24-26)
- 16 本引用でもサンスクリット文にある二箇所の説法師 (dharmabhāṇaka) は漢訳『道行』には見えるが、『小品』には見られない。「須菩提白佛言。其受學誦般若波羅蜜者終不橫死。若干百天若干千天常隨侍之。若善男子善女人爲法師者。月八日十四日十五日。說法時得功德不可復計。佛言。如是如是。須菩提。得其功德不可復計。若守般若波羅蜜者。其功德出是上去。何以故。須菩提。般若波羅蜜者。即是珍寶故。」(『道行』 T224, 443c15-21)、「世尊。若有善男子善女人。能受持讀誦般若波羅蜜者。終不橫死。若干百千諸天皆共隨從。若月八日十四日十五日二十三日二十九日三十日。在在處處説般若波羅蜜。其福甚多。佛言。如是如是。須菩提。是人説般若波羅蜜。得福甚多。須菩提。般若波羅蜜多有留難。何以故。般若波羅蜜是大珍寶。」(『小品』 T227.8.553a1-8)
- 17 漢訳『小品』(557a14-20)では bhikṣavo dharmabhāṇakāḥ は単に「説法者」であり、dhārmasravaṇikās は「聴法者」と訳されている。
- 18 「説法者は方便力を持つての故に、この五欲を受く。汝、この中において不淨の心を生ずること莫れ。応に念言を作すべし。我れ方便の力を知らず、法師、或いは衆生を利益し、善根を種えしめんが爲の故に、是の法を受用す。諸菩薩は障礙されることなし。」『小品』(T227, 580b25-28)、また『仏母出生般若』(T228, 668c5-10)も説法者と説法師とするも、比丘の語はない。
- 19 Vaidya [1960: 256, 21-26]
- 20 大正綜仏 (2006) (Vkn 12.22)
- 21 ただし、対応する箇所を見ると、チベット語訳には chos smra ba (法師) とあるが、漢訳は支謙訳「講法」、羅什訳「人」、玄奘訳「者」とあるばかりで、明確ではない。大正綜仏 (2004, 506-507) .
- 22 「爲他說。佛言賢士。諦聽諦聽善思念之。吾當爲護此經故。當說章句召護世四天王天。帝釋梵天王等諸神。以此章句召故。護世四天王天。帝釋梵天王。皆當擁護諸説法師持此經者。説此世所難信甚深經典時。使無能作留難。」(曇無讖譯『大方等大集經』 大正蔵 13, No.397 126b9-14):「復次佛告海意菩薩言。汝今諦聽極善作意。今爲汝説。呼召四大天王祕密章句。而此章句速能召集四大天王。有此正法之處來爲作護。亦當攝護其説法師。(惟淨譯『佛説海意菩薩所問淨印法門經』 大正蔵 13, No. 400, 519b26-29)
- 23 dharmabhāṇakapudgale duṣkarasaṃjñī bhavati.(Vaidya[1967:20, 7]) ただし、この用例は、チベット語訳とすべての漢訳には欠けている。
- 24 mahāgaṇavopasthānaśīlaśca bhavati sarvabodhisattvadharmabhāṇakāśuśrūṣaṇatayā (Vaidya (1967:28, 32) )
- 25 pravrajitaśca śrutadhārī dharmabhāṇako bhavati / sa bhūyasyā mātrayā śrutācāradhāraṇīpratīlabdho dharmabhāṇako bhavati anekēṣāṃ ca buddhakoṭīniyutaśatasahasrāṇāmāntike anekakalpakoṭīniyutaśatasahasrāṇyasampramoṣatayā / (Vaidya (1967:28, 32) )
- 26 so 'syāṃ sādhumatyāṃ bodhisattvabhūmau sthitaḥ san bodhisattvo dharmabhāṇakatvaṃ kārayati,

tathāgatadharmakoṣaṃ ca rakṣati / sa dharmābhāṇakagatimupagato 'pramāṇajñānānugatena kauśalyena catuḥpratisaṃvidabhinirhṛtayā bodhisattvavācā dharmam deśayati / (Vaidya (1967:51, 5-7) )

- 27 sa evaṃ pratisaṃvidā jñānābhinirhārakuśalo bho jinaputra bodhisattvo navamīm bodhisattvabhūmim anuprāptas tathāgatadharmakoṣaprāpto mahādharmabhāṇakatvaṃ ca kurvāṇaḥ arthavatīdhāraṇīpratilabdhaśca bhavati /... daśadhāraṇīmukhāsamkhyeyasahasrāṇi pratilabhate / (Vaidya (1967:52, 12-17) )
- 28 『法華經』法師功德品の法師については、伊藤瑞叡（1997, 1998）の研究がある。その論考でも、法師が備える清浄意根の作意という功德として、四無礙智と聞持・義・弁才の三陀羅尼を指摘している。また、この四無礙智と菩薩の十地を対照させて、詳細に考察している点も重要である。
- 29 「世尊よ、私もそのような説法者たちの利益のためにダーラニーの諸句を与えましょう (dharmabhāṇakānām arthāya dhāraṇīpadāṇi dāśyāmi)。そうすれば、そのような説法者たちに対して、隙 (avatāra)をねらい、隙を求めても、だれも隙につけこむことはないでしょう」。(Vaidya[1960b:233, 28-30]) (KN:397-398)
- 30 atha khalu te bodhisattvā mahāsattvāḥ samasaṃgṛhyā bhagavantamābhigāthābhiradhyabhāṣanta alpotsukastvaṃ bhagavan bhavasva vayaṃ tadā te parinirvṛtasya /  
svaṃ paścime kālī subhairavasmin prakāśayiṣyāmida sūtramuttamam // Saddhp\_12.2 //  
ākrośaṃstarjanāṃścaiva daṇḍa-udgūraṇāni ca /  
bālānāṃ saṃsaḥiṣyāmo 'dhivāsiṣyāma nāyaka // Saddhp\_12.3 //  
durbuddhinaśca vaṅkāśca śaṭhā bālādhimāninaḥ /  
aprāpte prāptasamjñī ca ghore kālasmi paścime // Saddhp\_12.4 //  
araṇyavṛttakāścaiva kanthāṃ prāvariyaṇa ca /  
saṃlekhaṇvṛtticāri sma evaṃ vakṣyanti durmatī // Saddhp\_12.5 //  
raseṣu gr̥ddha saktāśca gr̥hīṇāṃ dharmā deśayī /  
satkṛtāśca bhaviṣyanti śaḍabhiññā yathā tathā // Saddhp\_12.6 //  
raudracittāśca duṣṭāśca gr̥havittavicintakāḥ /  
araṇyaguptīm praviśitvā asmākaṃ parivādakāḥ // Saddhp\_12.7 //  
asmākaṃ caiva vakṣyanti lābhasatkāraṇiśritāḥ /  
tīrthikā batime bhikṣū svāni kāvyāni deśayuh // Saddhp\_12.8 //  
svayaṃ sūtrāni granthitvā lābhasatkārahetavaḥ /  
parsāya madhye bhāṣante asmākamanukuṭṭakāḥ // Saddhp\_12.9 //  
rājeṣu rājaputreṣu rājāmātyeṣu vā tathā /  
viprāṇāṃ gr̥hapatīnāṃ ca anyeṣāṃ cāpi bhikṣuṇāṃ // Saddhp\_12.10 //  
vakṣyantyavaraṇamasamākaṃ tīrthyavādaṃ ca kārayī /  
sarvaṃ vayaṃ kṣamiṣyāmo gauraveṇa maharṣiṇāṃ // Saddhp\_12.11 //  
ye cāsmān kutsayiṣyanti tasmin kālasmi durmatī /  
ime buddhā bhaviṣyanti kṣamiṣyāmatha sarvaśaḥ // Saddhp\_12.12 //  
kalpasamkṣobhamīśmasmin dāruṇasmi mahābhaye /  
yakṣarūpā bahu bhikṣū asmākaṃ paribhāṣakāḥ // Saddhp\_12.13 //  
gauraveṇeha lokendre utsahāma suduṣkaram /  
kṣāntīya kakṣyāṃ bandhitvā sūtrametaṃ prakāśaye // Saddhp\_12.14 //  
anarthikāḥ sma kāyena jīvitena ca nāyaka /  
arthikāśca sma bodhīya tava nikṣepadhāraṇakāḥ // Saddhp\_12.15 //  
bhagavāneva jānīte yādṛśāḥ pāpabhikṣavaḥ /  
paścime kālī bheṣyanti saṃdhābhāṣyamajānakāḥ // Saddhp\_12.16 //  
bhr̥kūṭī sarva soḍhavyā aprajñaptiḥ punaḥ punaḥ /  
niṣkāsanam vihārebhyo bandhakuṭṭī bahūvidhā // Saddhp\_12.17 //  
ājñaptiṃ lokanāthasya smarantā kālī paścime /



bhāṣiṣyāma idaṃ sūtraṃ parṣanmadhye viśāradāḥ // Saddhp\_12.18 //(Vaidya [1960b:164, 9-165, 7])

<sup>31</sup> nagareṣvatha grāmeṣu ye bheṣyanti ihārthikāḥ /  
gatvā gatvāsyā dāsyāmo nikṣepaṃ tava nāyaka // Saddhp\_12.19 //